

159/

東広島市高屋町大畠，杵原

西本 6 号遺跡見学会資料

1994（平成6）年10月22日（土）

財団法人広島県埋蔵文化財調査センター
財団法人東広島市教育文化振興事業団

【はじめに】

財団法人広島県埋蔵文化財調査センターおよび財団法人東広島市教育文化振興事業団文化財センターでは、1993（平成5）年4月から東広島市高屋町大島・杵原おおぼたけ きりはらにおいて、宅地造成事業に伴う西本6号遺跡の発掘調査を実施しています。調査2年目にあたる今年度の調査面積は、両センター併せて約13,200㎡です。この度は、両センターと東広島市教育委員会の共催で見学会を行うことになりました。

西本遺跡群（1～6号）は杵原川の西側に広がる低丘陵上に立地し、6号遺跡はこの遺跡群の西側に位置します。なお、この遺跡は一昨年度（平成4年度）に淡神文化財協会が調査し、弥生時代後期の竪穴住居跡や掘立柱建物跡などがみつかっています。また、昨年度（平成5年度）には、広島県埋蔵文化財調査センターの調査区から弥生時代後期の墳墓群（約170基）や竪穴住居跡などがみつき、東広島市教育文化振興事業団文化財センターの調査区からも、弥生時代中期から後期の竪穴住居跡や古代の掘立柱建物跡（神殿跡）などがみつかっています。

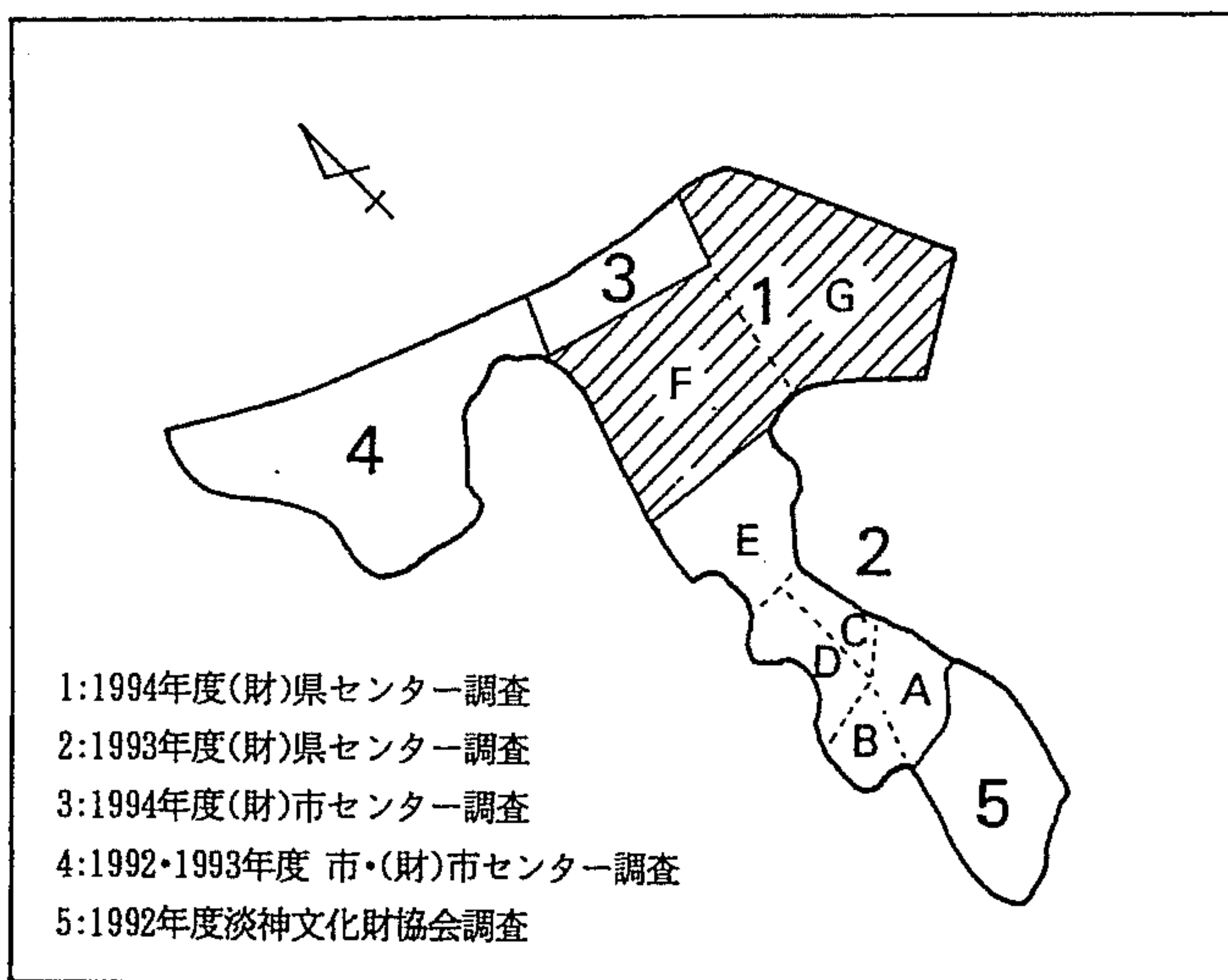


西本遺跡群の位置（1～6は遺跡名と同じ）
6. 西本6号遺跡，7. 古慈喜城跡

【(財)広島県埋蔵文化財調査センターの調査状況】

《調査の現状》

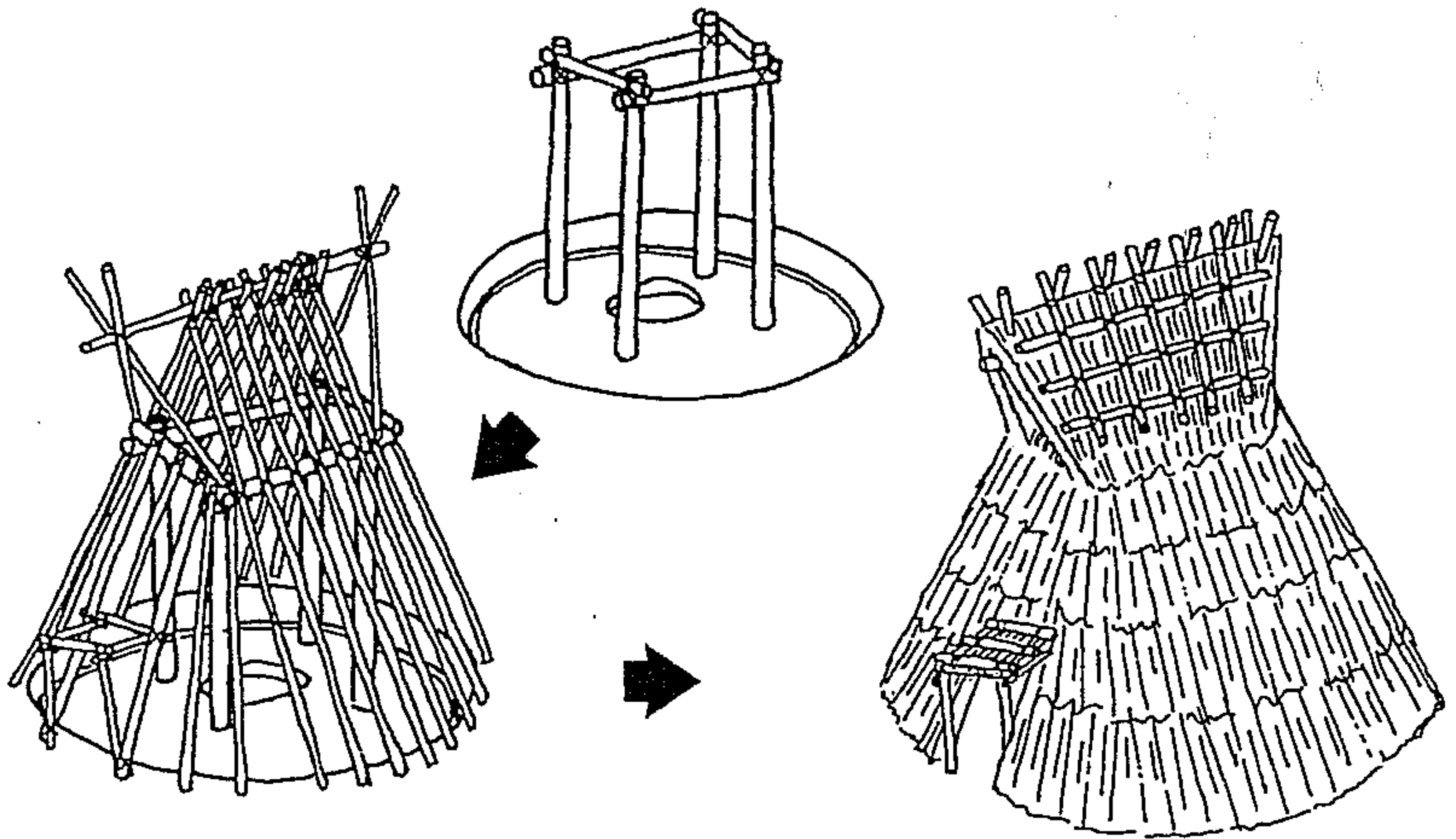
今年度は調査区を、昨年度の調査区のA区～E区に続き、F区とG区の2箇所に分けて調査を行っています。主な遺構は、弥生時代から古代にかけての住居跡20数軒や墳墓数基などがあります。その他、溝状遺構約10条や貯蔵穴^{ちようそうけつ}1基なども見つかっています。遺跡の発掘調査はまだ途中ですので、今回は調査の中間報告として、主に竪穴住居跡と墳墓についての説明をします。



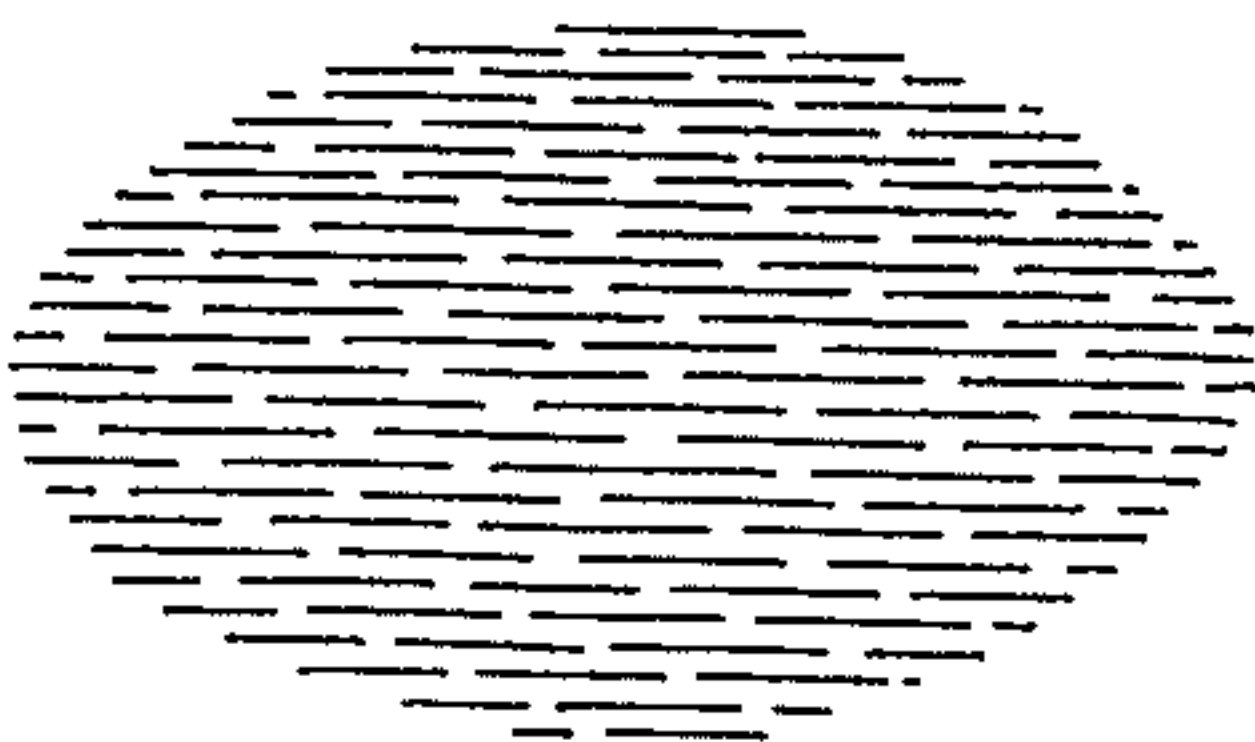
調査区配置図 (1:5,000)

①竪穴住居跡

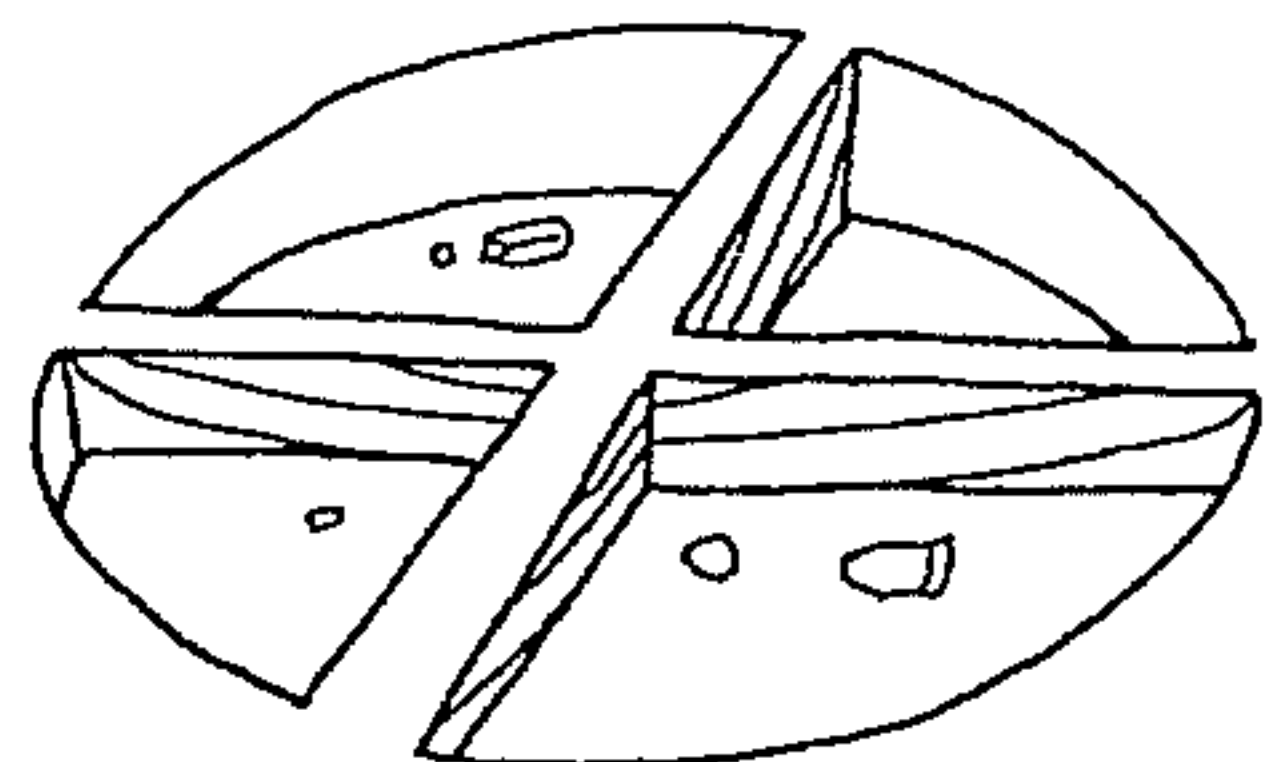
☆竪穴住居：地面を円形や方形・楕円形に掘り下げて床をつくり、骨組みとなる柱を立てて、その上に垂木^{たるぎ}を斜めに寄せかけ、さらに茅^{かや}や樹皮などで屋根^ふを葺いた住居です。このような住居は、縄文時代から古代にかけて多く造られていたようです。(次頁の復元図を参考にしてください。)



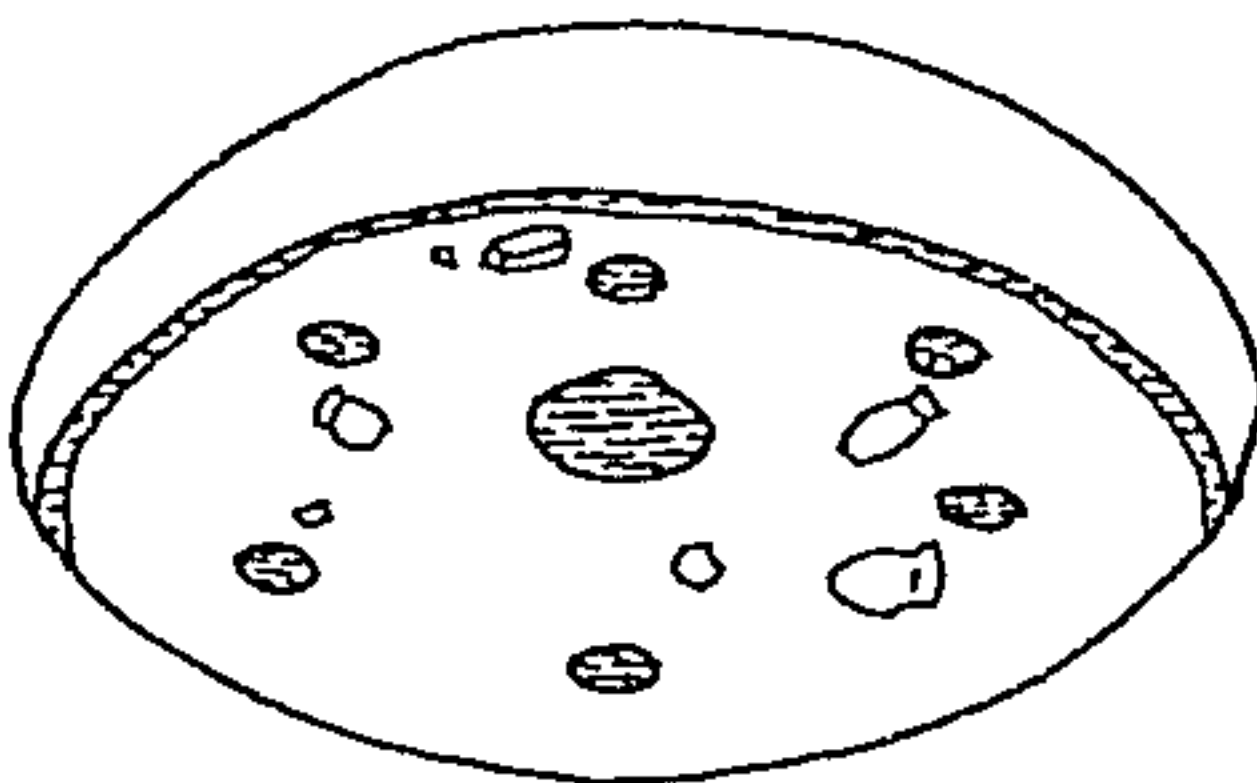
☆調査の方法：竪穴住居の跡は地中に床面や柱穴・炉などを残しています。この調査は次のように行います。



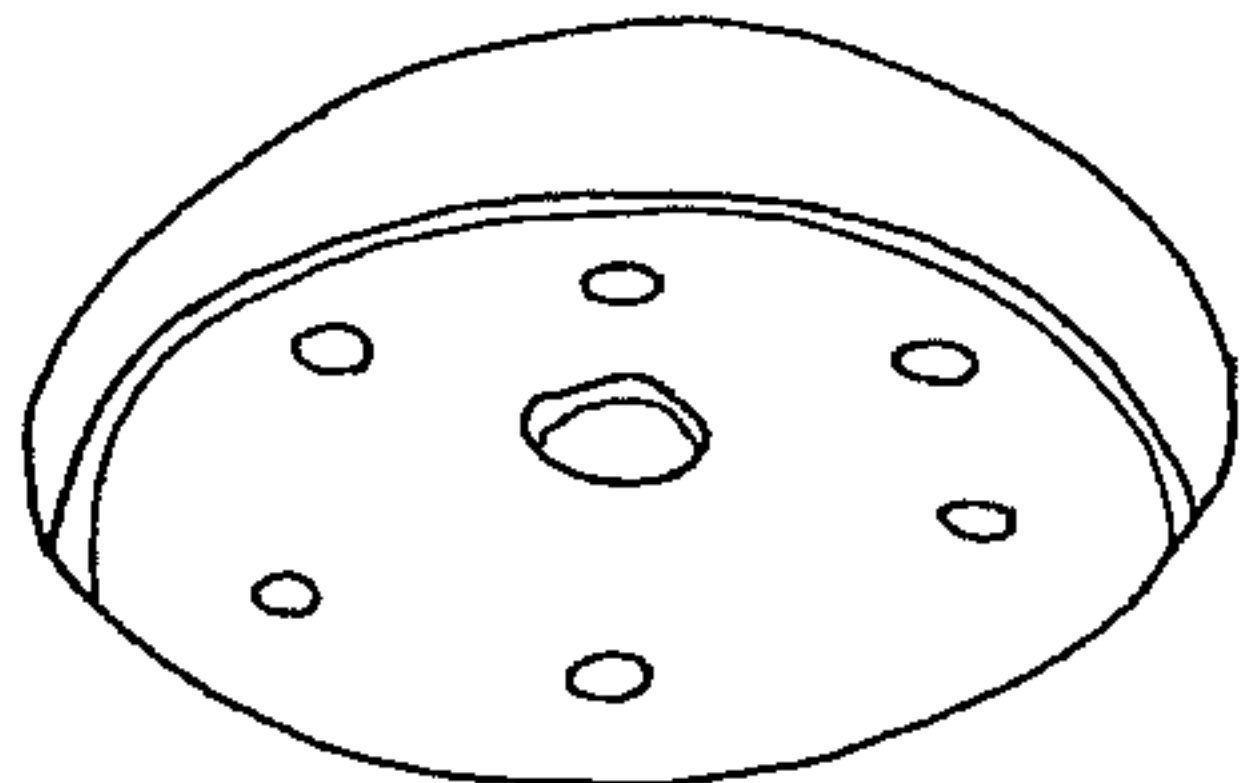
1:土の色や硬さの違いなどで、遺構を見つける。



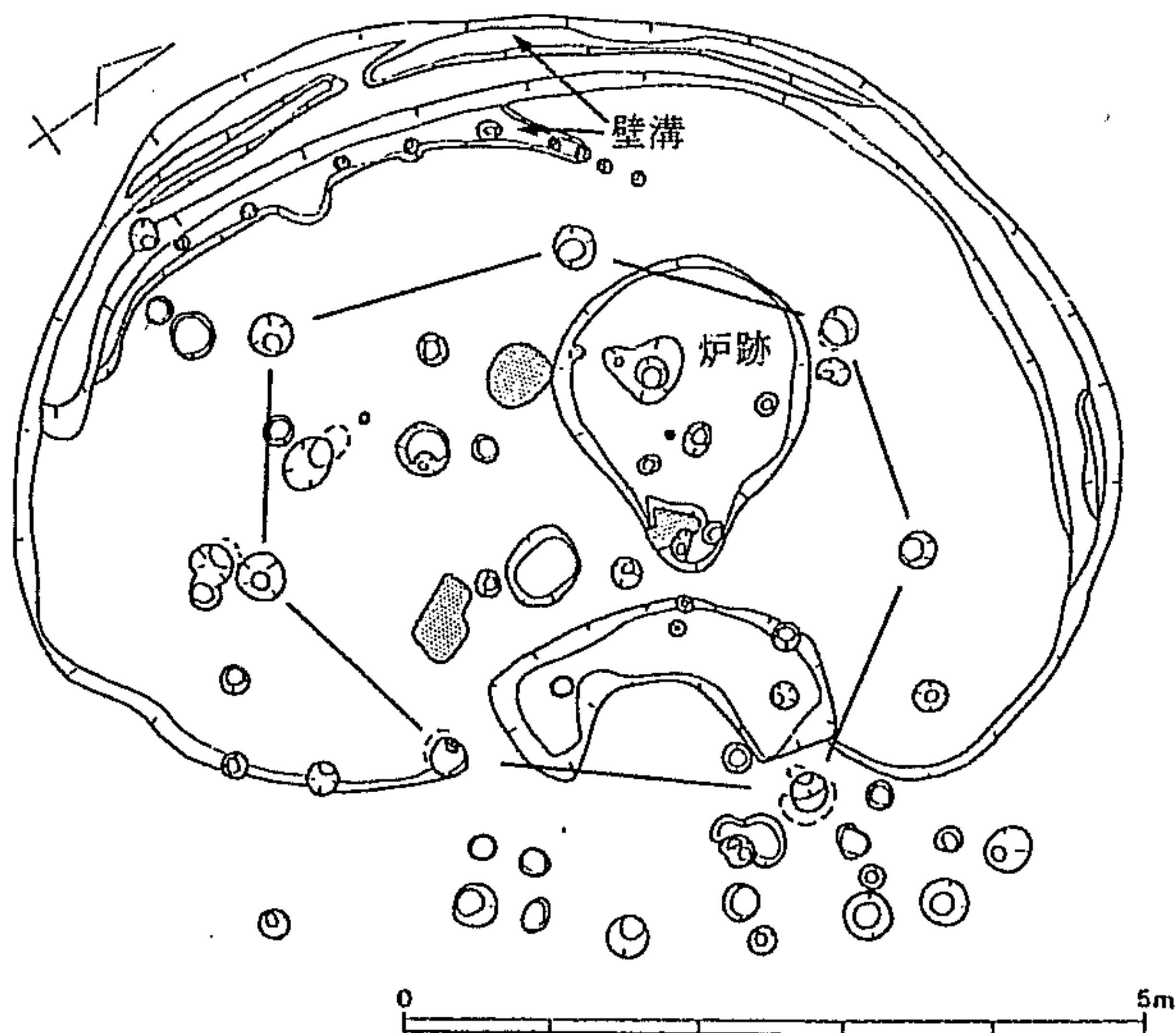
2:畦を残し、土の様子を観察し、記録する。



3:出てきた遺物を写真や図面で記録し、取り上げる。
(遺構の年代も考える。)



4:柱穴や炉跡・壁溝などを掘り下げ、写真や図面で記録して調査を終える。



弥生時代の竪穴住居跡（SB9）平面実測図

☆現在見つかったいる竪穴住居跡

〔SB9〕

平面形は楕円形で、大きさは最大径が7.4mあり、深さは0.4mです。骨組みとなる柱は7本で、中央に浅いくぼみの炉跡があります。なお、床面で古い住居跡の壁溝を見つけました。遺物は弥生土器や石庖丁・石鏃などが出ており、時期は弥生時代中期頃です。

〔SB11〕

平面形は楕円形で、大きさは最大径が7.4mあり、深さ0.5mです。多量の炭が出ており、焼失住居であることがわかりました。特に東半分は、垂木が放射状に焼け落ちている様子がよくわかります。遺物は土器や石鏃などが出ており、時期は弥生時代中期頃です。

〔SB12〕

平面形は隅丸方形で、東西4.3m・南北3.4m・深さ0.4mの大きさです。骨組

みの柱は2本で、中央には長方形の炉跡があります。また、壁溝がめぐっていますが、北から東にかけては二重になっています。遺物は土器のほか鉄片が出ており、時期は弥生時代中期頃です。

[S B13]

平面形は楕円形で、東西3.8m・南北（現存長）3.6m・深さ0.5mの大きさですが、南側をS B12に少し掘り込まれています。骨組みの柱は4本で、炉跡や壁溝もありますが、東側は壁溝が二重になっており、家を拡張したものと思われます。遺物は弥生土器（3個体分）や砥石^{といし}などが出ており、時期は弥生時代中期です。

[S B16]

平面形は円形で、直径が3.4mあり、深さが0.6mの大きさです。骨組みの柱は2本で、中ほどに炉跡があり、壁溝がめぐっています。遺物は弥生時代中期の土器（甕^{かめ}など）や鉄鏃^{てつぞく}1点が出ています。

[S B17-b]

平面形は方形（西側斜面部分は欠失）で、大きさは一辺が5.3mあり、深さは0.2mです。骨組みの柱の本数は不明ですが、かまと住居の外側を囲む溝があります。なお、壁溝はありませんが、壁際の床面に小さなピットがいくつか並びます。遺物は土師器^{はじぎ}や須恵器^{すえき}などが出ており、時期は古墳時代後半から古代にかけてのものと思われます。

[S B17-c]

平面形は隅丸方形で、一辺の長さが5mあり、深さは0.3mの大きさですが、S B17-bに掘り込まれているので、実際はもっと深かったものと思われます。骨組みの柱の本数は不明ですが、深い壁溝がめぐっています。さらに10cm下にはさらに古い住居跡（S B17-d）があり、それを埋めてS B17-cの床面を造っているようです。遺物は弥生土器や砥石などが出ており、時期は弥生時代後期です。

[S B19]

平面形は円形で、直径は6mあり、深さが0.4mの大きさです。遺物は弥生時代後期の土器（鉢^{はち}・壺^{つぼ}など）が出ています。

[S B21]

平面形は隅丸方形で、大きさは一辺の長さが5mあり、深さは0.4mです。骨組みは4本柱で、中央に炉跡の焼土面があります。遺物は土器（甕・碗）などが出土し、時期は弥生時代の終わり頃です。

②墳墓

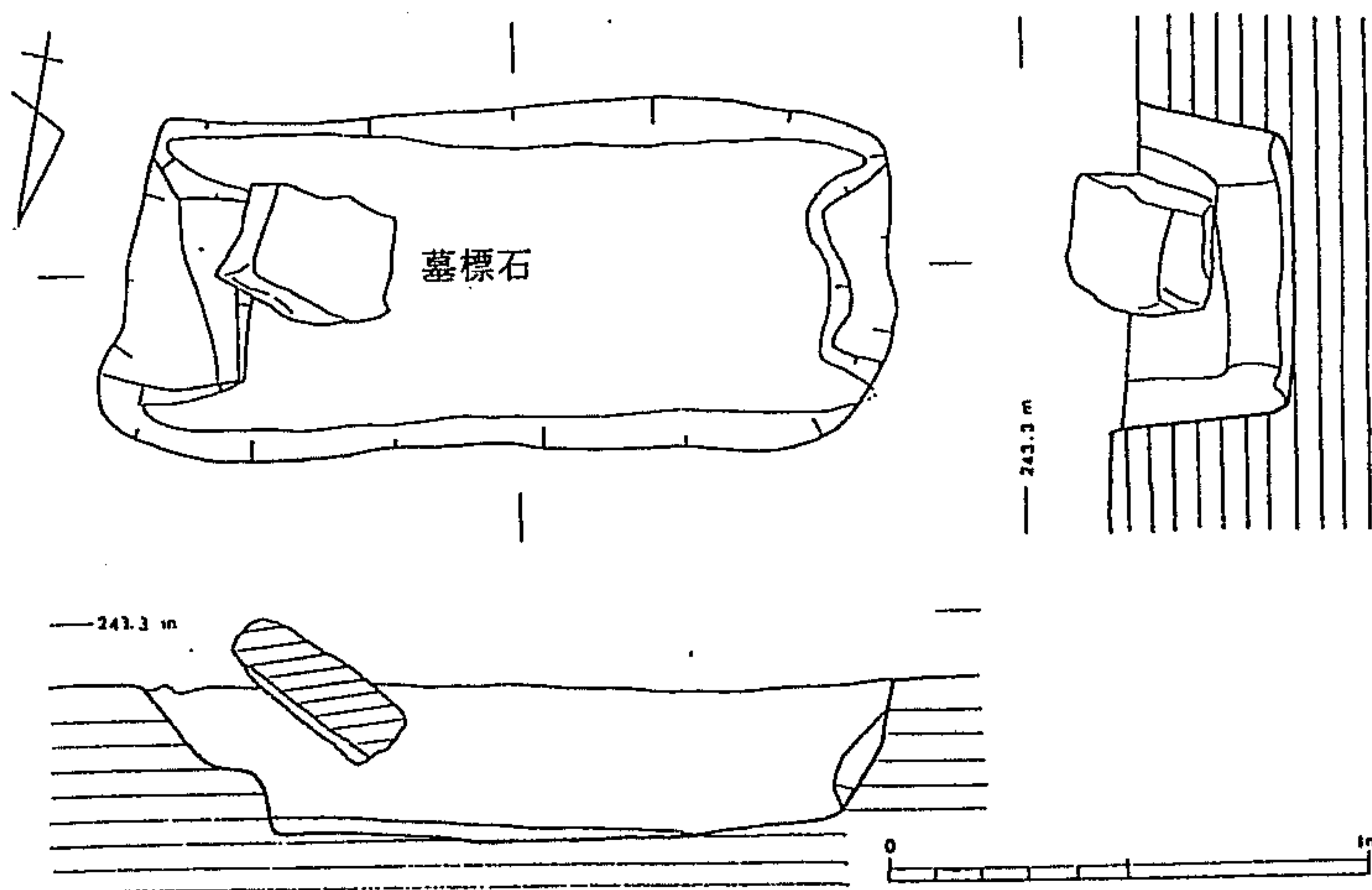
☆弥生時代の墳墓

F区の南側で土墳墓（SK187）が見つかりました。この土墳墓は長方形の墓壇^{ぼこう}を掘り、木棺を設置してその中に遺体を葬ったものと思われます。また、墓標石^{ぼひょうせき}と思われる石を伴っていました。

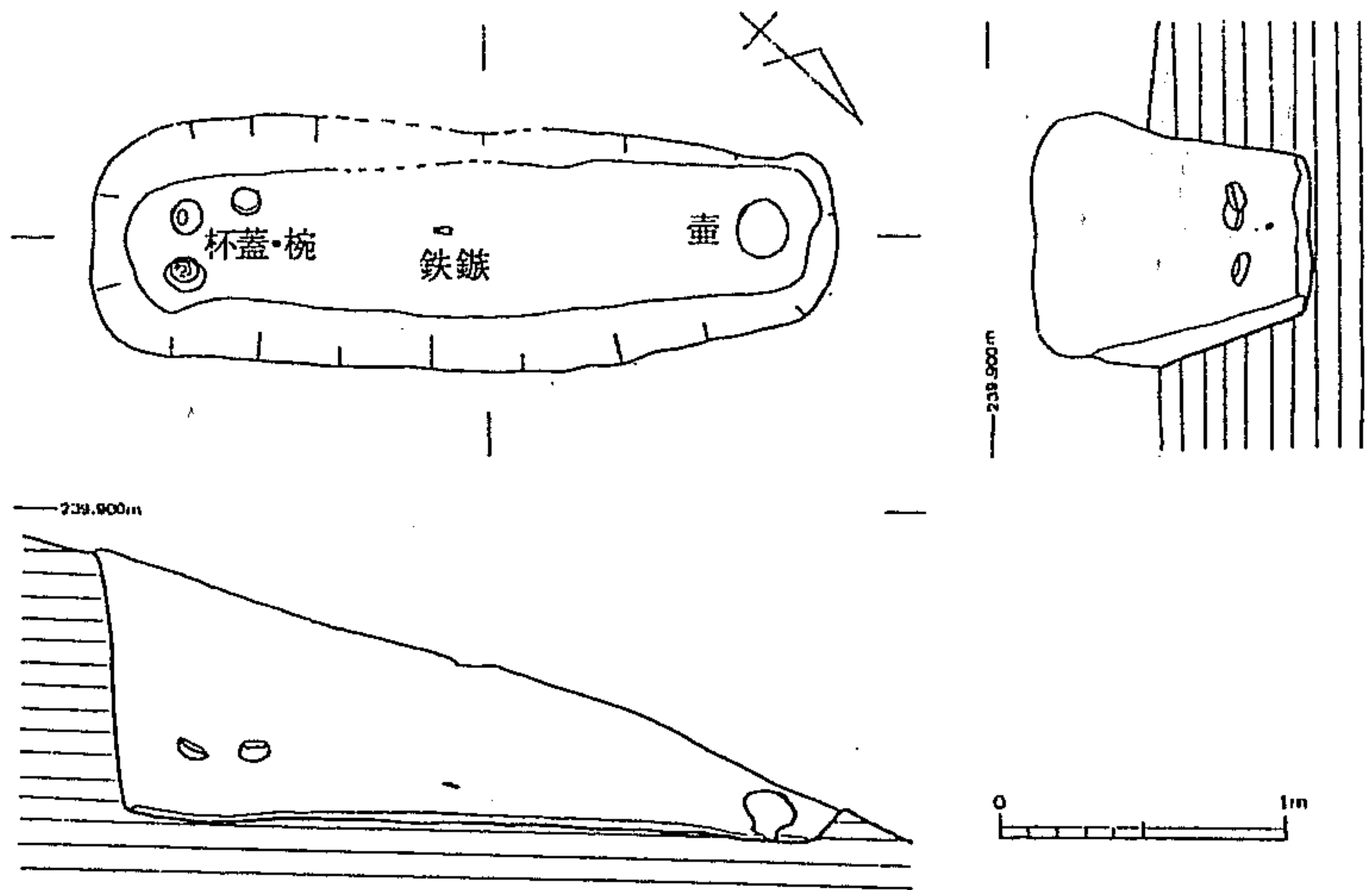
☆古墳時代の墳墓

F区の北西端においては、古墳時代の土墳墓（SK222）が見つかりました。F区の東北部では小規模な横穴式石室を埋葬施設とする古墳（ST1）も見つかっています。この古墳では棺台石^{かんだいし}の上に小さい木棺を置いていました。

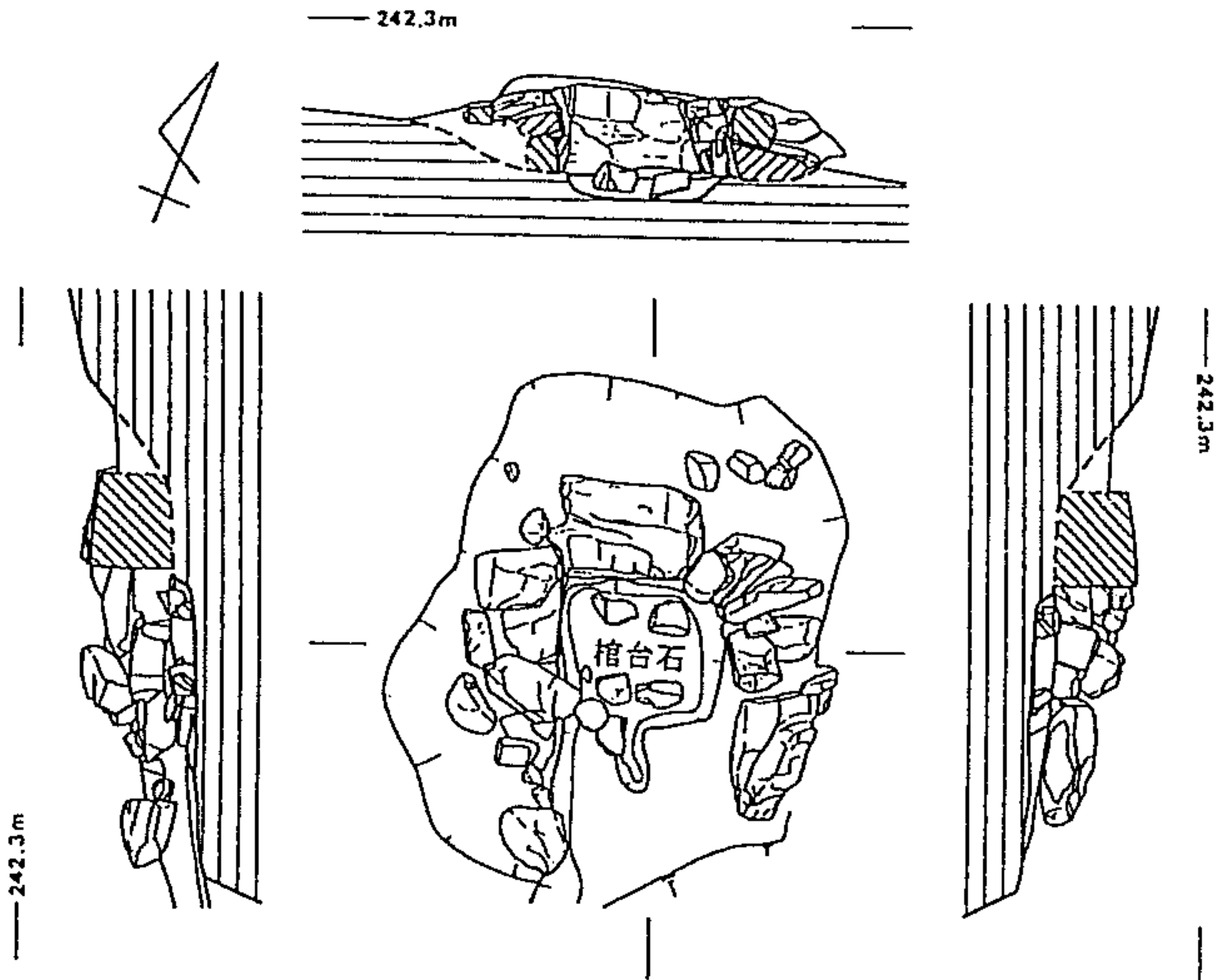
遺物は、SK222から6世紀後半の須恵器（壺1・杯蓋2・椀1）や鉄鏃1点が出土し、ST1の石室内からは骨片や鉄釘14点などが出土しています。



弥生時代の土墳墓（SK187）実測図



古墳時代の土壙墓 (SK222) 実測図

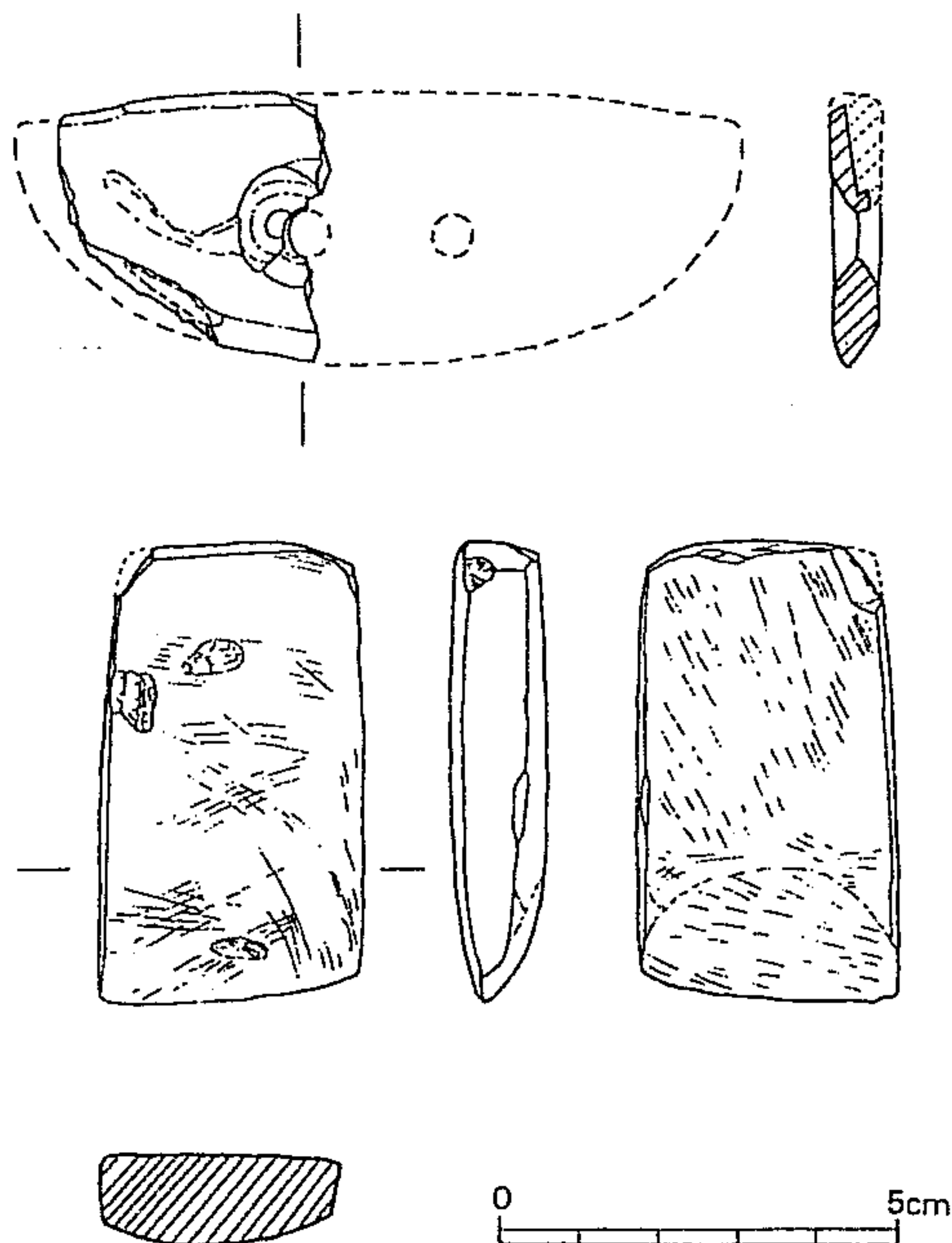


横穴式石室 (ST1) 実測図

《まとめ》

- ① 今年度の調査区からは、主に弥生時代中期から後期・古墳時代の住居跡が見つっていますが、特にG区中央部から南部にかけて集中しています。
- ② 弥生時代の墳墓は、昨年度調査した墓群がF区南端部まで広がり、住居と墳墓が分かれて営まれています。
- ③ 古墳時代の墳墓は、土壌墓や横穴式石室墳が見つかり、市センター調査区内には石棺がありました。それぞれ時期差はありますが、古墳時代の後半頃（6～7世紀）に相次いで営まれているようです。

＝出土遺物実測図＝



弥生時代の竪穴住居跡（SB9）から出土した石庖丁と
土壌（SK206）から出土した扁平片刃石斧の実測図

【（財）東広島市教育文化振興事業団文化財センターの調査状況】

《調査の成果》

（１）みつかった遺構

今回、東広島市教育文化振興事業団の調査区からは時期不明の土壇 1 基、土壇墓 2 基、溝状遺構 1 条、段状遺構や古墳、近世の道、土地境界線などがみつかりました。今日の報告では主要な遺構の説明をおこないたいと思います。

古墳（S T 2） ----- 長方形の墓壇に板石で棺を組み、周囲に三日月形の周溝をめぐらした古墳です。石棺の規模は、長さ80cm、幅30cm、深さ40cmです。周溝はもっとも幅の広いところで2.2m、深さ20cmを測りました。墓壇の大きさから幼児が葬られていたと考えられます。遺物は土器の破片と鉄滓が出土しました。

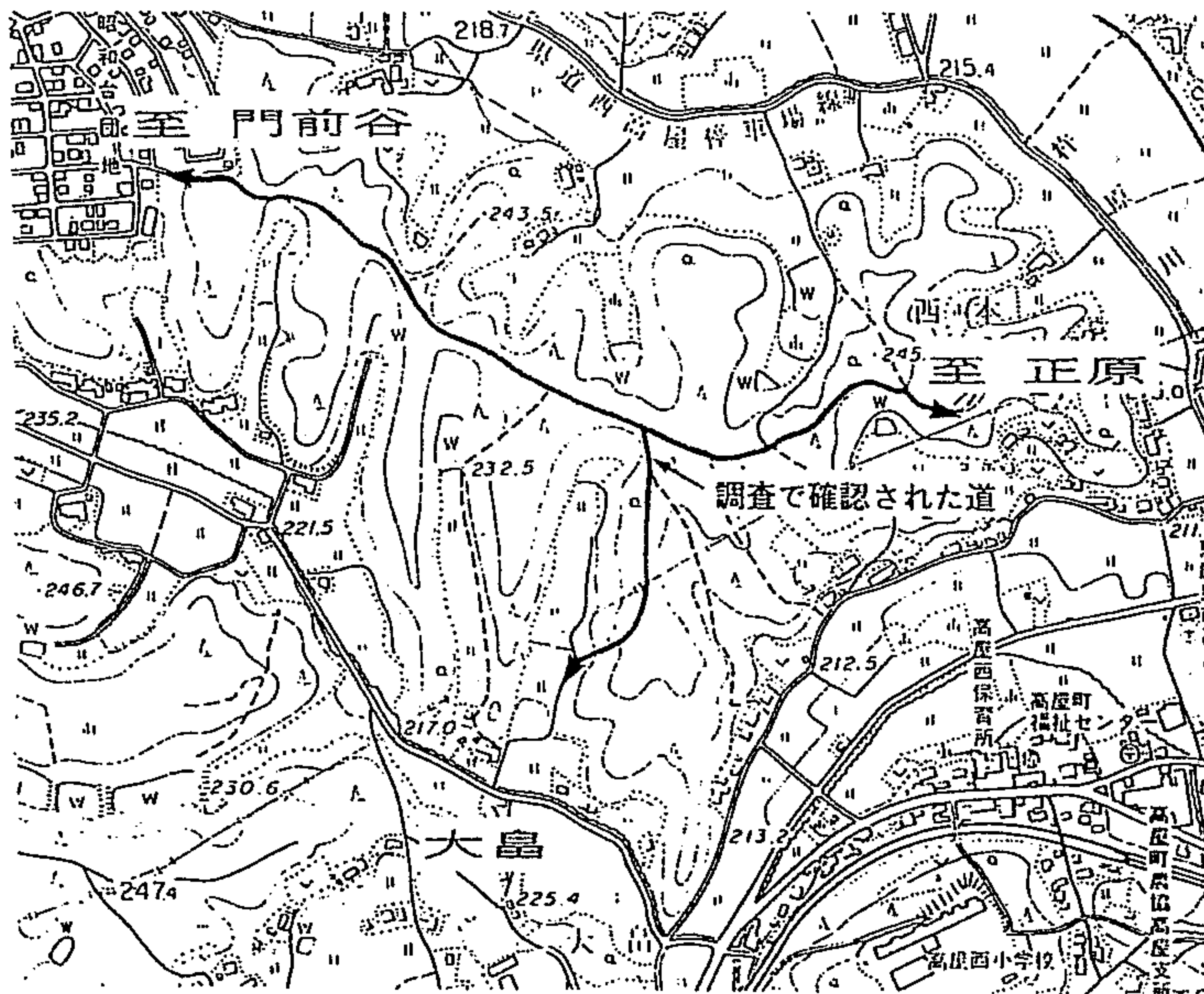
近世の道 ----- 調査区の中央を南北にのびている断面が「U」字形の道で、長さは本調査区で確認した部分が約27m、幅は約2.5mを測りました。この道は杵原の正原地区と稲木の門前谷地区とを結ぶ道の枝道で、調査区北側の山林から分かれて県センターの調査区を通り、大畠へ通じています。遺物は出土しませんでした。

土地境界線 ----- 近世の道に沿って走る溝状遺構で、長さ約15m、幅は約20～40cmを測りました。南へ行くに従って道から離れていく様子がうかがえます。北側には砂利が詰った状態で残っており、これが土地を区切る目的で造られたと考えられます。遺物は出土しませんでした。

（２）遺構の年代

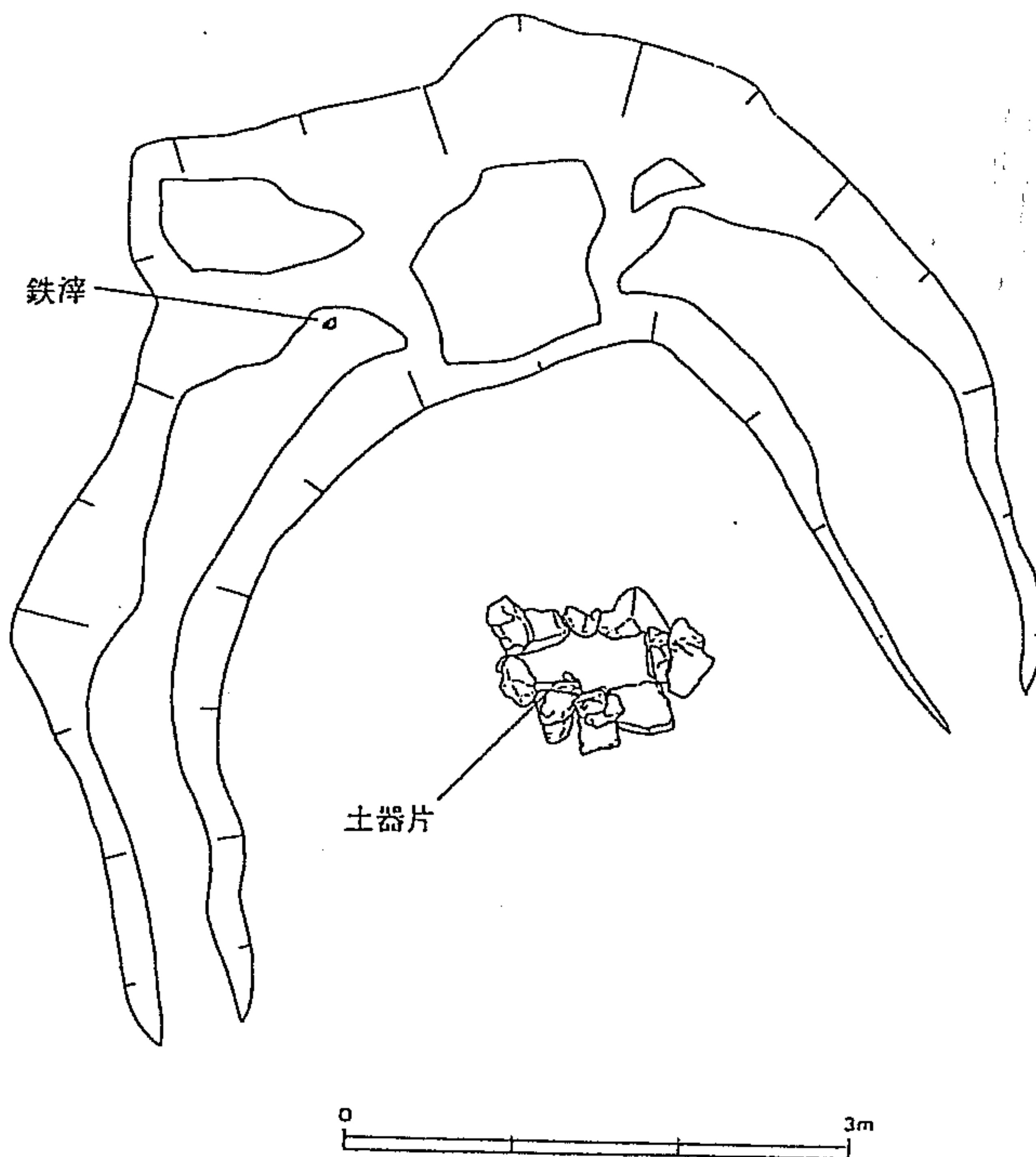
古墳は出土遺物が少ないため、はっきりした築造年代はわかりませんが、杵原の槇ヶ坪 2 号遺跡の第 6 号古墳と立地や構造が類似しています。この古墳から出土した土器は 6 世紀初頭ごろのもので、本古墳もおおよそ 6 世紀の初頭を前後する時期に造られたのではないかと考えています。

道の造られた時期も出土遺物がないためわかりませんが、「芸藩通志」巻 77 にみられる文政年間(1818～28年)の稲木・大畠村の絵図にはこの道が描かれており、この時期にはすでに造られていたと考えられます。また、土地境界線は道の埋土を掘り込んでいることから、道の造られた時期よりあとといえるでしょう。



第1図 調査で確認された「芸藩通志」にみられる道

MEMO



第2図 古墳 (ST 2) 実測図 (1 : 500)

MEMO

西本 6 号遺跡遺構配置図

